

大学礼拝  
説教集

第 14 号



2010

東北学院大学

## 表紙の絵について

土樋キャンパスの「ラーハウザー記念東北学院礼拝堂」には、正面の講壇後方部分にステンドグラスがあり、キリストの昇天とそれを見守る「11人」（イスカリオテのユダの姿はありません）の弟子達の姿が描かれています。このステンドグラスはイギリスから取り寄せたもので、費用はシュネーダー夫人の知人からの献金でまかなわれました。現在の額に換算すると五千万円以上したと言われます。第二次大戦中はベニヤ板で覆われ、日章旗が掲げられていたそうです。

大学礼拝

# 説教集

第 14 号

2010

東北学院大学

# 目次

## 巻頭言

宗 教 部 長

佐々木 哲夫 …………… 4

## 時を見分ける能力

理 事 長

平河内 健治 …………… 6

## 賢い反論と主張

— 国際基準制定を例として —

学 院 長 (大学長)

星 宮 望 …………… 10

## どちらを価値あるものとするか

仙南伝道所牧師

佐藤 義子 …………… 16

## 出会の不思議

涌谷教会牧師

平井 孝次郎 …………… 20

## 大きな喜び

宗 教 部 長

佐々木 哲夫 …………… 25

## わたしだ。恐れることはない。

大学宗教主任

永井 義之 …………… 31

## 向こう岸に行きなさい

大学宗教主任

野村 信 …………… 35

祭司的あり方と預言者的あり方	大学宗教主任	北	博	……	40
十字架に現れた神の力	大学宗教主任	出村	みや子	……	45
豊かさを作り出す存在へ	大学宗教主任	村上	みか	……	51
ムナの話し	大学宗教主任	佐々木	勝彦	……	55
人間の尊厳とクローニング	キリスト教学科長	原口	尚彰	……	61
アウシュヴィッツのコルベ神父の贖罪愛	経済学部教授	増田	周二	……	65
火で塩味を付ける	経営学部教授	保坂	和男	……	69
神と試練	法学部准教授	横田	尚昌	……	74
あなたは魂と体が離れていませんか	工学部准教授	志賀野	洋	……	79
ENGLISH CHAPEL SERVICE	宣教師・文学部教授	D・N・マーチー	……	……	86
編集後記	大学宗教主任	北	博	……	87

## 巻頭言

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

東北学院大学への受験生が質問にきました。聖書の言葉「地の塩」の意味を教えてくださいとい  
うのです。聖書の箇所は、マタイの福音書です。

### マタイによる福音書、第五章一三節

<sup>13</sup>あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が  
付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけ  
である。

この聖句から少なからず説教した経験がありますので、その場で即答することもできたのですが、  
あえてそれをせずに次のように答えました。「入学許可を得て本学の学生になると、大学礼拝での

説教やキリスト教学の講義などにおいて、『地の塩』の意味について考える機会が沢山あります。まず、自分でその意味について探求してみてください。探し求めても分からないときは、卒業までに是非もう一度質問に来てください」と。

高校卒業まで、学生たちは、多くの知識や技術を修得してきました。定理を巧みに使って数学の問題を解くことや世界史や日本史の出来事の時代背景などに関し、積み上げてきた量は膨大です。さらに、大学入学後は、これまでの知識や技術にさらに磨きをかけるだけでなく、それを含めたすべての事柄に対し「なぜ」と問い掛けることが期待されています。自明と思われる事柄にさえ「なぜ」を投げ掛けるのです。極端に言うならば、幼稚園の園児のように見るもの聞くものすべてに「なぜ、なぜ」と問うのです。しかし、幼稚園の先生と違い大学の教師は簡単に答えを教えてくださいません。なぜなら、最初の答えは、疑問を持った学生自身が出すべきだからです。換言するならば、学生諸君は「この事柄に関しこのような疑問をいただき、次のように考察したのですが、これで良いでしょうか」と問うべきであると考えます。

この『説教集』が、私たちの人生を考える手がかりになればと願っています。

# 時を見分ける能力

理事長 平河内 健 治

ルカによる福音書、第一二章五四節～五六節

54 イエスはまた群衆にも言われた。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『わか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。55 また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。56 偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」

只今読みました箇所は、個人的には大変懐かしいものです。昭和二十七年（一九五二年）、今から五十八年前、私が東北学院中学一年生に入学して間もなく、同級生に誘われて、塩釜の本町にある塩釜バプテスト教会で聞いた牧師さんの説教の題が「時の徴」というもので、今読んだ箇所の話でした。どのような話だったかは記憶にありませんが、このルカ一二章の五四節と五五節のところはよく覚えています。斉藤久吉牧師と同級生の顔、献金のお金を用意していなくて、友達からもらったことやその時の教会堂の雰囲気も思い出されます。

今朝改めてこの箇所を読み直した時に、その後が続く「偽善者よ。このように空や地の模様を見



分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」という群集に向けられたイエスの問いが私の心に迫って来ます。

イエスが偽善者と呼んでいる人々はパリサイ派の人々です。彼らは形式的に律法を守るだけで、それが作られた意味内容を無視する人々です。真面目ではあるけれども、形式にこだわっているために、本当のところが見えてこないというのです。天気を見分ける能力は、時を見分ける能力と相通ずるのに、見分けられないのは何故かと問います。

その答えは、すでにイエスがルカによる福音書第八章の九節から一〇節のところで述べておられる御言葉がヒントになります。その中心は「見ても見えず、聞いても理解できない。」です。英語への翻訳の中に、“You look, but you do not see. You listen, but you do not hear.”とパラフレーズされているものがあります。LOOK という動詞は意志をもって見るといふこと、また、LISTEN という動詞も同じく意志を働かせて聞くという意味です。しかし、見えてこない (do not see) 、聞こえてこない (do not hear) 、つまり、からだ全体の感覚として知覚できないというのです。何が邪魔しているのです、見えていても、見えてこない、聞いていても、聞こえてこないというのです。邪魔しているのは、余計な考えや思い煩い、こだわりや不信仰です。これについては、私の本の中にも触れています (『カウンセリングと言語学』、松柏社発行、一三二—一三三九頁)。

これらを捨てることによって、神の愛、イエス・キリストのこころが見えてきます。私の心であ

る「私心」がないところ、「我欲」を捨てたところで、神の恵みを感じられたり、聖書のメッセージが聞こえてきます。学校現場にあって、知ることが求められている今の「時の徴」というものを考えさせられます。

私は昨年四月から東北学院幼稚園の園長を兼ねています。一番の気がかりは、怪我や事故です。渡り廊下とコンクリート通路の段差を踏み外しただけでの怪我やコンクリート壁から飛び降りての着地失敗の大腿骨の骨折など、先生が気をつけていても、子供が不器用になってきているのか、事故は絶えません。中高での部活の事故も報告されています。これまで大学を主たる仕事場としていた私にとっては、大学の側からのみ法人の業務をみていると見えてこない部分、大学の習慣にこだわっては見えてこないものが多くあります。気をつけなければならない危機管理の問題は、理事長という立場になり、法人の一つの学校の立場からフリーになって初めて見えてくるものがあります。同時に、理事長という立場も捨てて、物事や人を見る必要もあります。

昨年三月二六日の東北学院中学校の卒業式に来賓として招かれたときに気が付いたことがあります。卒業生は一人一人壇上にあがり、修了証書を受け取り、回れ右をして自分の席に戻りますが、しっかりできている人は二割強でした。一生懸命練習した形跡は見られるのですが、不完全な人が八割弱でした。何か、自分で自分の感覚を鍛えることが難しくなっている、もしかして、不器用な若い世代が生まれているかもしれないという危惧の念を抱きました。皆さんはどうでしょうか？

ポーツ・ジムが盛んですが、むしろ、機器に頼らない、己が体で己が体を鍛えることが肝要な時代ではないかと改めて感じたところです。病気の兆候をほとんど感じ取れない大変な時代になるのではないかと心配になってきます。

神から与えられている命と体を鍛えずに粗末にすることは、神に対し、罪を犯すことであり、不信仰であり、神の愛と恵みに対しての反逆であります。今こそ、神に正しく応答してゆく時なのではないでしょうか!?

私たちは、勝手な思い込みやこだわりから、人を傷つけ、人と争いを起こし、私たちの命を自分だけの所有と勘違いし、愛に欠ける人間となってしまうことが往々にしてあります。私たちは、私たちの命と体は神からの賜物であることを忘れがちであります。そのために、鍛錬すること、人々に仕えるために用いることを忘れ、粗末にしてしまいます。愛の薄い人間となってしまう。そのような現実を率直に神様に告白し、神の御子イエス・キリストによる罪の贖いを通して、自分自身そして隣人との愛の繋がりに導いていただけるよう祈りたいと思います。

# 賢い反論と主張 — 国際基準制定を例として —

学院長（大学長） 星 宮 望

マルコによる福音書、第一二章一三〜一七節

13 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて隔れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。14 彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適合しているでしょうか、適合していないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」15 イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来てみせなさい。」16 彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、17 イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼は、イエスの答えに驚き入った。

今日は、この御言葉をきっかけとして、本来主張すべきことをきちんとして主張することの大切さを

考えて見ましょう。これまで、ややもすると、キリスト教の教えは、遠慮して、ひとに譲ることはかりであると思われるかもしれませんが。しかし、このマルコの福音書の記述のように、イエス様は、必要な時には鋭い「反論」をしておられます。私たちも必要な時には、しっかりと反論すること、あるいは、しっかりと提案についての主張をするべきであると思いますし、その為の訓練・トレーニングをする機会は大学生活のなかにあると思います。また、国の教育制度にも関連すると思います。このような視点で、最近の話題について考えて見ましょう。

最近、NHK-TVで、「A to Z：ニッポンは勝ち残れるか？ 激突 国際標準」という番組が放映されたのでご覧になった方も多いと思います。話の主題は、「超高圧送電技術の国際規格」です。しかし、この番組においても少し触れていましたが、日本が国際的に優れた技術開発をした成果が、これまでは、なかなか国際標準に取り入れられてきませんでした。最近の国際規格問題の主なものをあげれば、

① 携帯電話規格

② 液晶TV規格

③ 超高電圧送電規格

少なくともこの3つがあります。

今回、番組で取り上げられたものは主として、③の超高電圧送電規格です。将来の世界的に大き

な需要（1000兆円との予測もあります）を見越し、それぞれの企業や国が、国際規格を自分らに有利なものにしようという熾烈な戦いをしています。このようなことに対して、日本人は理解不足というか鈍感であると思います。これまで、数々の痛い思いをしてきていることが政府レベルでも十分に考慮されていなかったことを残念に思います。今回は、最終的に東京電力(株)とそれに協力してきた企業連合で、なんとか国際規格に「1、100kV送電（110万ボルト超高電圧送電）技術規格」を認めさせることに成功しましたが、その実際は、「中国が大規模に採用することを決定したために、多くのヨーロッパ系の国々が反対できなかった」というだけのことです。

これまでの日本は、いわゆる「デファクトスタンダード」といわれる慣習によって守られてきました。これは、慣習的にこれまで長年認められてきた方式で、特別の規格を定めなくても、「準規格」並みに扱おうということでした。しかし、1995年にWTOで厳格な規約が制定されてからは通用しなくなり、日本が世界の潮流から遅れることになりました。

まず、①携帯電話の実用化については日本が世界で最も先進的でしたが、「通信方式」の国際規格の制定において、最終的にはヨーロッパ系の方式が採用されたために日本の企業の製品は外国に輸出できないことになりました。このことについては、最後にもう少し触れます。次に②の液晶TVや電気冷蔵庫の規格についても日本が後塵を拝しています。そして、今回、NHKが取り上げた超高圧送電システムの規格です。

ところで、国際規格でも最も実績のあるドイツ規格協会の例を紹介しますと、我々が日常的に用いている白い紙の大きさを「A4、A5・・」などの規格、金属の「ボルトやナットの形状や寸法」などなど2万点以上にわたる物品の国際規格を自分らが定めていると誇っています。まさに、彼らが言うように「標準を制するものが市場を制する」ということがあてはまります。このようなことの重要性に気が付いている日本人があまりに少ないのではないのでしょうか？政府のこれまでの対応についても甘すぎることが多いのが実態です。

その1例として、携帯電話の国際規格交渉についての友人の努力と悲劇をお話しましょう。彼（S君）は、東北大学工学部電子工学科の私と同じ研究室に所属していました。私が助教教授で、彼は学部4年生と修士課程2年の合計3年間一緒に研究生生活を送りました。その後、彼はNTTに入社し、その少し後に、分割されたNTTドコモに移籍しました。彼は、学術的に優秀であったばかりでなく、他人とのコミュニケーション能力も高く、そして英語を話す能力も人並み以上でした。そのようなことから、いつの間にか、「携帯電話の通信方式」を定める国際委員会への日本代表の一人に選ばれてしまいました。その後、大きな困難を経験したそうです。このような場では、政府からの色々な意味での支援が必要ですが極めて不十分であったようです。今回のNHK・TVを見ても、ヨーロッパ各国が政府の支援を受けているにもかかわらず、日本政府からの支援はあまり見えてきません。S君はそのような中で孤軍奮闘しましたが、国際規格交渉の会議をおこなっ

ていた上海で急死してしまいました。

ところで、国際規格の話ではありませんが、似たような国際的な係争についても一つ紹介します。半導体はもともとアメリカで発明されたものですが、日本で機能や品質レベルが上がり、高性能の半導体メモリなどが格安でアメリカへ輸出されて、アメリカの市場を席卷していきました。そこに貿易摩擦が生まれ、アメリカで裁判になりました。そのときに日本を代表した人材が、非常に手薄だったことがショックでした。なぜかと言うと、アメリカの法廷ですから、英語を喋れないといけない。それに、法律もわかっていなければならぬ。もちろん技術内容もわかっていなければなりません。ところが、英語も喋れて、法律もわかって、技術内容もわかる人間は、全日本に5人くらいしかいないということでした。なぜかというと、子どもの頃、文科系と理科系に分けてしまおうでしょう。幅広く、世界的に競争できる人材が育っていない。その典型例でした。その当時、このことを聞いて、非常にびっくりしましたが、それが日本の現状でした。しかし、今でも状況は、同じか、あるいはもっと悪いと思います。何人かの高等学校の先生にお話したら、「絞った勉強をさせたほうが目標の大学に入りやすいからそれで良い」とおっしゃる方が大部分です。それでよいのでしょうか？絞った方が短期的な結果は出るけれども、将来本人が伸びるような教育になっているかが問題と思っています。

最後に私の研究室出身者のことを紹介させていただきます。東北大学工学部電子工学科の星宮研究室



出身のNさん（女子学生）は、大学4年生を卒業後、エレクトロニクスの大企業であるT社に入社し、知財部に配属されました。そこで特許などに関連した仕事に10年間従事した後、退社し、M大学の法科大学院に入学し、3年後に新司法試験を受験し、1回で合格しました。昨年のことです。彼女は、電子技術に精通し、英語もほぼどしゃべれますし、今回、司法試験を通りましたので、国際的に活躍できる法曹として、活躍してくれると期待しています。彼女のような幅広い能力を持った人物を私の研究室から輩出できたことを誇りに思っています。最後に少し自慢話になりましたこと、お許しください。

私たち東北学院大学に学ぶ学生諸君も、自分の狭い専門分野だけでなく、広い教養を身につけてしっかりした判断力を持ち、そして社会に出て活動する時に、「賢い反論」や、「説得力のある提言」を出来るような実力をつけてくださるよう期待しております。

# 「どちらを価値あるものとするか」

仙台南伝道所牧師 佐藤義子

ヘブライ人への手紙、第一章二三節〜二六節

23 信仰しんこうによって、モーセは生まれてから三ヶ月間、両親りやうしんによって隠かくされました。その子この美うつくしさを見、王おうの命令めいれいを恐れおそえなかったからです。24 信仰しんこうによって、モーセは成人せいじんしたとき、ファラオの王女おうじょの子こと呼ばよばれることを拒こほんで、25 はかない罪つみの楽たのしみにふけるよりは、神かみの民たみと共に虐待ぎやくたいされる方ほうを選び、26 キリストのゆえに受うけるあざけりをエジプトの財宝さいほうよりまさる富とみと考かんがえました。与あたえられる報むくいに目めを向むけていたからです。

モーセが生まれた時代、エジプトではイスラエルの民の人口が増え続けておりました。そこでエジプトの王は彼らの力を弱める為に、イスラエル人の上に強制労働の監督を置き、重労働を強制し、虐待しました。粘土をこね、れんがを焼かせ、あらゆる農作業などの重労働によって彼らの生活をおびやかし、奴隷化していきました。旧約聖書の出エジプト記には「彼らが従事した労働はいずれも過酷を極めた。」(一・十四)と記されています。

それでも、イスラエル人の数は減少しなかったので、エジプト王は彼らに男の子が生まれたら殺

せという命令を出しました。モーセが生まれたのは、この幼児虐殺の命令が下されていた時でした。モーセの両親は、モーセが生まれた時、王の命令に逆らい、三ヶ月間、隠して育てておりました。けれども、もうこれ以上隠しきれなくなった時、両親はパピルスの籠を用意し防水して、モーセを籠に入れ、ナイル河畔の葦の茂みの間に置きます。そこへファラオの王女が水浴びに来て籠を見つけ、泣いている赤ん坊をふびんに思い自分の息子として育てます。その後モーセは王家の子として最高の教育を受けて成長しますが、後に彼は自分がイスラエル人であることを知ることになります。

本日の聖書の二十四節には、「モーセは成人した時、ファラオの王女の子と呼ばれることを拒んで、はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待される方を選んだ」とあります。今、私達がモーセの立場に立たされたら、どちらを選ぶでしょうか。一方は、これまでどおり、エジプトの王女の息子として富と権力をもって生きる道、もう一方は、奴隷として抑圧と辱めの中でイスラエル人として生きる道です。世間一般の人達は、迷わず、王家の一人として生き続けることを選ぶでしょう。なぜならその方が人間として幸せに生きることが出来ると思えるからです。

ところがモーセは違いました。彼は自分が属するイスラエル民族という「唯一の神を信じる、神の民の一員」として生きる道を選びました。その理由が二十六節前半に記されています。

「キリストのゆえに受けるあざけりをエジプトの財宝よりまさる富と考えた」からだといので

す。モーセは、二つの道の、どちらを選ぶかという時の基準を、「どちらの生き方が、正しく価値ある生き方か」を考えました。私達が住む社会では多くの場合、「どちらが人間として幸せに生きるか」で判断します。それによれば、富は多い方が良いし、権力もあつたほうが良いのですから、当然、どちらも持っていない奴隷よりも、王家の人間として生きる方を選ぶでしょう。

モーセは、富と権力を得るよりも神に従う奴隷として生きる道の方を、正しく価値あるものと思いました。富と力のある生活は、表面的には幸せに見えます。けれどもその幸せは過ぎゆくものであり、ほんのしばらくの間、続くだけのものです。自分を楽しませる罪ある生き方は、最初は楽しいことから始まりますが、その結末は、悲しみと死で終わります。はかない楽しみを追い求める、罪ある生き方は、目に見える世界をすべてとし、目に見えない世界には価値を置きません。

モーセが選択した道は、生きる上での楽しみや栄光を追い求める生活を捨てて、奴隷である自分の民族に戻るといふ、あえて苦難の多い道でした。その理由を聖書は二十八節後半で伝えていています。「(神から) 与えられる報いに目を向けていたからです。」

神から与えられる報いは目に見えない世界に属します。しかし彼はその見えない報いをエジプトの富より優位に置きました。エジプトの富よりはるかに価値あるものと判断したのです。

モーセの両親がエジプト王に逆らってまで我が子の命を守ったのも、又、成人したモーセが王家の身分を捨てて、自分の民族のもとに戻ったのも、どちらも、「信仰によって」の行為であったことを、このヘブライ人への手紙は伝えています。

信仰とはいうまでもなく、神様を信じること、神様への絶対信頼です。聖書が語り伝える神は、人間の手で作った神や、頭で考え出した神ではなく、天と地とすべてのものを造り、私達人間を造られた神であり、今なお、信じる者にとっては、日々、生きて働いておられる神のことです。

信仰は、「神が私と共におられる」という強い確信を私達に与え、被造物である人間を恐れる必要がないことを私達に気付かせ、真理に向かって人を自由にします。

私達は見える世界だけを見て、表面的な幸せを追い求めていくのか、それとも聖書が伝える神を信じて、神に従う正しい道、神からの報いに目を向けて生きていくのか。モーセが決断したように、私達も又、決断しなければなりません。一方を選び取ることは一方の道を捨て去ることです。私達の生と死を支配する神への信仰が与えられて、正しい価値基準を持つことができるよう祈ります。

## 「出会の不思議」

涌谷教会牧師 平井孝次郎

ヨハネによる福音書、一章四三〜五一節

43 その翌日、イエスは、ガリラヤへ行こうとしたときに、フィリポに出会って、「わたしに従いなさい」と言われた。44 フィリポは、アンデレとペトロの町、ベトサイタの出身であった。45 フィリポはナタナエルに出会って言った。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」46 するとナタナエルが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったので、フィリポは「来て、見なさい」と言った。47 イエスは、ナタナエルが御自分の方へ来るのを見て、彼のことをこう言われた。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りがない。」48 ナタナエルが、「どうしてわたしを知っておられるのですか」と言うとき、イエスは答えて、「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下の下にいるのを見た」と言われた。49 ナタナエルは答えた。「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」50 イエスは答えて言われた。「いちじくの木の下の下にあなたがいるのを見たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見るようになる。」51 更に言われた、「はつき

り言っておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」

人生に於いてある人と出会うと云うことは、その人にとって大きな意味を持つことがあります。今日のみ言葉でも43〜45節に連続して「出会う」と云う言葉が出てまいります。「出会い」は人にとってしばしばその人の生活のあり方の転機をもたらします。独身生活を続けていた人がある人と出会うと結婚にまで到りますと新しい夫婦の生活へと導かれます。またある友人や先輩、大学での教授との出会いが新しい職業の道へと進む切っ掛けになる場合があります。正に「出会い」は人生の重要な新しい道へのターニングポイントになることを知らされます。人生におけるこの事実はこの世的な現実には於ける真理でもありません。通常、真理と云うのは、ギリシャ哲学に見られる主観と客観の対立を通して世界に内在する普遍的な概念を意味するわけですが、それとは別に人間の実存に於ける主観的体験を通しての人類に共感出来る実存的真理があります。聖書に於ける真理は神と人との出会いによって人格的な深い所で主体的に新しく生かされる事実であると云えます。

昭和二八年に来日し、全国各地で伝道され、昭和三十年五月、我が東北学院大学でも講演説教されたドイツの神学者エミール・ブルンナーは一九三八年に発表された「出会いとしての真理」(Wahrheit als Begegnung) の中での聖書に於ける神と人との「出会い」の真理について語られて

います。その中で人と人とのこの世的な出会いは相対的なものであるが神と人との出会いは相対世界の中で生起する、絶対的な真理として人に体现されると云っています。

さて今日のみ言葉によれば43節イエスはフィリポに出会ってとある様にこの出会いは主イエスの側からの接近により出会うと云う事実注目したいと思えます。出会いの主体性は主イエスの側にあります。原文の「出会い」は *euphōrōn* ヘリスコ (ギ) でその訳はヘブライ語で *פגג* マサ 英語では Find ドイツ語では *Begnung* であります。この訳を見てもわかるように原意は、発見するとか見つけ出すと云う意味であります。ヨハネ福音書を忠実に読むならば主イエスがフィリポを見つけ出されたことと云うことであります。キリスト教的な視点で見ると、生命の神から断絶された暗闇の世界に在る死すべき運命の人間に対する神の愛が今、働き出されたことを意味しています。主イエスはまず十二使徒を選び公生涯としての伝道を開始されたのであります。フィリポはこの出会いによって人格の深い所で覚醒され彼もまた知人に対する出会いを通して伝道に促されます。同じギリシャ出身のナタナエルに出会って、わたしはモーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会ったと告白します。すると彼はナザレから何か良いものが出るだろうかと疑問を呈します。しかしフィリポは怯まず「来て見なさい」とすすめます。こうして出会ったナタナエルも主イエスの導きによって信ずる者とされたのであります。ナタナエルは十二使徒ではなく一般のキリスト者であります。キリストの弟子とされた者であります。この一連の出来事は神ご自身が救われがたいこの地上の人々



に対する救いのために働き出された召命物語の第一歩であります。この召命によって導かれた弟子たちの背景には父子聖霊なる一体の神の働きがあります。主イエスキリスト、十二使徒、キリスト者の伝道の流れは今日も続いています。神が人と出会って下さると云う聖書の最初のメッセージはフィリポの云うようにモーセにあります。神はモーセに対して会見の幕屋を造るよう指示されます。出エジプト三三章七節に臨在の幕屋とありますが臨在 **מֵעַד** は会見 (meeting) の意味があります。主イエスは幕屋の幕の壁を破って今日私達に近づいて来て出会いを求めて下さっているのです。この神の熱情に在って伝道は今も進展し、東北学院も在るのです。この出会いによって私達に何が起ころうか。主イエスのみ言葉を聞きましょう。51節、更に云われた「はっきり云っておく天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るようになる。」と云われています。これは私達の思いを絶する驚くべき予言であります。これは神の救いが達成する終末的出来事を示しています。これは天地創造の出来事の真実が明らかにされることを意味しています。この事実を見ることが赦されると云うことは、大きな恵みであります。主イエスとの出会いが単に人間的な人格の内部に起ころる実在的な出来事にとどまらず全宇宙的な広がりを持つ驚くべき真理、(Wahrheit) が明らかにされると云うことでもあります。全き方が来られる時、私達の人的知識は廢れます。そしてここに私達の希望が在ります。大学は本来、教会の伝道的教育的業としてスタートしたことは歴史的に明らかであります。

単に科学や人文学的知識にとどまるのではなく、神との出会いの真理によって覚醒されたキリスト者の育成にその使命を見出し続けて欲しいと願うものであります。

最後に告白的に申し上げるならば私自身かつて東北学院に学んだ時、キリスト者として導かれ、学Yの委員長として学長室でエミール・ブルンナと出会い、また、御殿場でのエミール・ブルンナを囲むY M C A指導者協議会に出席することが許され、またこの会に参加されていた帝國ホテルの設計者でもあり宣教師でもあられたウィリアム・ボーリス師と個人的面談が許されたことが今日伝道者としての道に進んだ原点となった事を思い起こしています。「出会いの不思議」を思うものであります。

最後にこの様な信仰の伝達の流れの中心におられる方の御言葉に注目しなければなりません。

6 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。

(ヨハネによる福音書、一四章六節)

# 「大きな喜び」

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

ルカによる福音書、第二章一―二一節

1 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2 この  
れは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3 人々  
は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。4 ヨセフもダビデの家に属し、その血  
筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上つて  
行った。5 身ごもっていた、いいなすけの MARIA と一緒に登録するためである。6 ところが、  
彼らがベツレヘムにいるうちに、MARIA は月が満ちて、7 初めての子を産み、布にくるんで  
飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、  
主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。  
「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あ  
なたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、  
布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへ

のしるしである。」<sup>13</sup>すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14 「いと高きところには栄光、神にあれ、

地には平和、御心に適う人にあれ。」

<sup>15</sup>天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。<sup>16</sup>そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼ひ葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。<sup>17</sup>その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。<sup>18</sup>聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。<sup>19</sup>しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。<sup>20</sup>羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

<sup>21</sup>八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

\*

最初のクリスマスの夜です。野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちに天使が現れて、「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがた

のために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と告げました。この聖書の箇所は、クリスマススの場面を記した有名な箇所です。注目したいのは、「大きな喜びを告げる」との表現です。特に、「告げる」は、若者たちが知っている「エヴァンゲリオン」の言葉と関連している用語で、「福音を伝える」の原義があります。「大きな喜び」であるクリスマススの出来事が、福音であるということです。短い時間ですが一緒に「大きな喜び」の意味について考えたいと思います。

\* \*

ある時、大学のクラスで次のような問答を学生としました。「私が君の財布から千円札を取ったとしよう。どうしたら、その行為を許してくれますか。」学生は答えて、「千円を返してください。そして、謝ってください」と言いました。私は、「お金を返し心から謝罪すれば、君は許してくださいねですね。では、それで盗んだという私の罪も消えますね」と聞き返しました。すると、彼は即答して「いいえ、盗んだ罪は消えません」と断定しました。「では、どうすれば、私の罪は赦されますか」とさらに聞きますと、しばらく考え込んだ後、最終的に「それは分かりません」と答えました。何気ない学生との対話ですが、この問答には、旧約聖書のユダヤ人たちが取り組んできた「罪の赦し」の問題が取り扱われています。

ユダヤ人は、罪自体を消し去るためには、いのちをもって贖わなければならないと考えていまし

た。すなわち、いのちの尊さをもってでしか、罪のおぞましさを消すことができないと考えていました。しかし、人のいのちをもって罪を償うならば、生きている人は一人もいなくなってしまうことでしょう。そこで、ユダヤ人たちは、人の罪を消すために、動物のいのちで罪を贖うようになり、やがて、神殿での祭儀が整えられてゆきました。しかし、動物のいのちは、人のいのちとは不等価なものですから、完全な赦しを実現することはできません。そこで、罪を自覚するたびに、ユダヤ人たちは、贖いの儀式を繰り返すことになったのです。やがて、預言者たちは、完全な赦しがこの世界に到来することを告げ始めました。いわゆる、メシア到来の預言です。人々はメシア（救い主）の到来を待望するようになりました。メシアが来るならば、人の罪は完全に赦され、神の国が樹立されると期待したのです。それは、ユダヤ民族の希望となりました。

\* \* \*

さて、約二千年前、エルサレムの南に位置する町ベツレヘムの地方で、羊飼いたちが、夜通し羊の群れの番をしていました。すると、彼らの周りを主の栄光が照らし出したのです。天使が現れ、「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」と語ったのです。メシアが生まれたとの知らせは、待ちに待った救いの到来、完全な赦しの到来を意味します。ユダヤの人々にとって「大き

な喜び」の時です。羊飼いたちは、すぐに飼葉桶に寝かされている乳飲み子を見つけ出し、天使の言葉とおりの出来事が起きていることを確認し、神をあがめ、賛美したのです。

メシア到来が具体的にどのような出来事として展開するかについては、赤子が寝かされているだけのクリスマス夜の夜には、まだ明確ではありませんでした。しかし、その後のイエス・キリストの生涯がそれを明らかにします。特に、最期の出来事である十字架がそれです。なぜなら、イエス・キリストの十字架は、罪の贖いの出来事だったからです。動物のいのちではなく、神の一人子であるイエス・キリストのいのちが捧げられたという十字架の出来事は、何度も繰り返す必要のない完全な贖いの出来事でした。人々の罪を完全に赦す出来事です。とうとう、罪を消し去る方法が、この世の歴史の中に、すなわち、私たちの次元の中に与えられたのです。それは、確かに、大きな喜びでした。

\*\*\*

さて、クラスの中での問答に戻りたいと思います。「どうすれば、私の罪は赦されますか」との問いに対し、学生は「分かりません」と答えました。しかし、私たちの歴史の中に罪の赦が存在していたのです。約二千年前のユダヤの国ベツレヘムで起きた出来事、イエス・キリストの誕生と十字架の出来事です。やがて、この出来事は、ユダヤ人だけでなく全世界の民のためであったこと

が明らかにされました。それゆえ、メシア到来の出来事は、福音として全世界へ伝えられ、やがて、日本にも伝わったのです。そして、二〇〇九年の仙台にも及んでおります。主の天使の言葉「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである」の言葉を私たちに告げられた福音として受けとめたいと思います。



# わたしだ。恐れることはない。

大学宗教研主任 永井義之

## ヨハネ福音書、第六章十六〜二十一節

16 夕方ゆうがたになつたので、弟子でしたちは湖畔こはんへ下りて行つた。17 そして舟ふねに乗り、湖みずうみの向むこう岸きしのカファルナウムに行いこうとした。すでに暗くらくなつていたが、イエスはまだ彼らかれのところには来きておられなかつた。18 強い風かぜが吹ふいて、湖みずうみは荒れ始はじめた。19 二十五ないし三十五スタディオスタンばかり漕こぎ出だしたころ、イエスが湖みずうみの上うえを歩あるいて舟ふねに近ちかづいて来こられるのを見みて、彼らかれは恐おそれた。20 「わたしだ。恐おそれることはない。」21 彼らかれはイエスを舟ふねに迎むかえ入れようとした。すると間まもなく、舟ふねは目指めざす地ちに着ついた。

この聖書の箇所は、五千人に食べ物を与えたという記事の直後の出来事で、弟子たちがイエスを一人残して湖の向こう岸カファルナウムに漕ぎ出した時の話です。後続の文章にそのとき舟は一つうしかなかつたとありますから、イエスは湖の上を歩いて弟子たちの舟に追いついたことになります。一読すると奇跡物語のひとつであるように読めますが、よく読んでみると主イエスを奇跡行為者として描くというより別のところに主眼点があるように思えます。湖を漕ぎだした弟子たちの舟

が遭遇したのは強風であり荒れた湖でした。しかもそのとき頼りとなる主イエスは舟に乗り組んでいない。そのような中で弟子たちが見たのは、湖の上を歩いて彼らに近づき舟に乗り組もうとする主イエスの姿でありました。弟子たちに近づいた主イエスが語られたのは「わたしだ。恐れることはない。」との言葉でしたが、弟子たちは当然湖を歩いて主イエスが来たとは思えず、何か霊でも見ているのではないかと恐れたのかもしれない。

さて、主イエスは舟が強風に荒れた湖で狼狽している弟子たちに向かって「わたしだ。恐れるな」と語られたと聖書は伝えておりますが、日本語の文脈ではこの言い方がある意味自然な言い方です。幽霊でも他の何者でもなく「私」＝主イエスが弟子たちの困窮した場面で現れたということでしょう。ここで「わたしだ」と訳されたもの言葉は「エゴー エイミ」という言葉で、英語でいえば I am. に相当する表現です。同じヨハネ福音書の中で「わたしはある」と訳されている箇所もあります（七章二四、二八節）。この「わたしはある」という言い方は旧約以来の古い言い方です。ご存じのようにモーセがシナイ山での神顕現、すなわち燃える柴の中から神があらわれ、モーセに出エジプトの使命を与えたというあの出来事です。モーセは自分など適任ではないと言って渡るのですが、「わたしは必ずあなたと共にいる」と神は保証の言葉を述べます。しかしモーセは自分が同胞のところに行っても誰も信じないし、どの神から遣わされてきたのかと問われると、いって、なおも拒もうとしたとき、神はその名を明かし「わたしはあるという者だ」と告げました。それでも固

辞しようとするモーセに、神はモーセの兄弟アロンと一緒に遣わすと語り「わたしはあなたの口と共にあり、また彼の口と共にあってあなたたちのなすべきことを教えよう」と保証するのです。「わたしはある」と自己紹介する神は、モーセと共にいる神であることが明らかにされます。「わたしはある」という表現は、「共にいましたもう神」なのです。

湖を歩いてきた主イエスが「わたしだ。恐れることはない。」と語られた時、それは「わたしは、あるというものだ。恐れるな」ということであり、荒れた湖で舟が沈むかもしれないと恐れおののいていた弟子たちに「わたしだ」||「わたしはあなたたちと共にいる」との保証の言葉でありました。ここには、もちろん、イエスとは何者なのだという問いが背後にあります。そしてイエスこそ神から遣わされた神の子キリストなのだという主張があります。

湖の上を歩いて弟子たちの乗った船に近づいたイエスということだけですと、単なる奇跡的な物語で終わってしまいます。そんなことが可能であろうかと、私たちの思いはあらぬ方向に飛んで行ってしまいます。それよりはむしろ聖書が示そうとしていることは、弟子たちと共におられる神の真実な姿でありました。そもそも福音書が主イエスを描くとき、弟子たちが主イエスを理解していないというテーマは繰り返し現れてきます。主イエスとは何者であるのか、自分たちの先生であることは確かだし、人々も喜んでその教えを聞いている事実もあったでしょう。でも、十字架の死と復活の後でないと、弟子たちは主イエスの真実の姿を認めることはできなかったのです。

私たちと共にいましたもう神がおられる。わたしたちにそのことが信じられるか。弟子たちと同じように困難に直面しては右往左往し、立ち往生してしまう私たちであります。そのようなわたしたちであることを認めたくえで、困難の中にあってもなお倒されることなくやっていけるとすれば、それは聖書が指し示すように主イエスを「共にいましたもう方」として見出すことにかかっているのではないのでしょうか。

祈りましょう。

神よ。私たちは自分のとり囲まれている現実に圧倒されてなすべを知らない者です。しかし、その私たちにあなたは「わたしだ。おそれるな。」との御声をかけてくださいます。私たちと共にいましたもうあなたがおられるなら、私たちは何を恐れるべきでしょうか。どのようなときにも、冷静に、あなたの御声を聞くものとしてください。

主イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン

(2009・11・18 多賀城キャンパス礼拝)

# 「向こう岸に行きなさい」

大学宗教主任 野村 信

マタイによる福音書、第八章一八〜二三節

18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」21 ほかにも、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」23 イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。

今、お読みしました18節に、「イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸へ行くように命じられた」と書かれています。主が、ガリラヤ湖のほとり、カファルナウムの町で、大勢の群集に囲まれて、教え、癒し、人々の世話をしていた時です。突然、主は、弟子たちに向こう岸へ行きなさいと命じられたのです。弟子たちは、ほとんどの者が漁師であったので、湖に

漕ぎ出すことには慣れていたはずですが。しかし、この日は、空が曇っていて、湖の上で嵐に遭うかもしれないという予感があったかもしれません。ガリラヤ湖は、晴れていても突然暴風雨が吹き荒れることがあります。しかも、向こう岸までは、早ければ四時間くらい、遅いと半日くらいかかったことでしょう。兎に角、主イエスから、向こう岸へ行くように命じられ、弟子たちは、少々不安な気分で船の準備をし始めたと思います。

さて、この時、律法学者が近付いて来て、主イエスに言いました。「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従ってまいります」と。大変いさぎよい、決意にみちた告白をしています。この律法学者の申し出に対して、主イエスは、「そうですね、それでは、是非私に従ってください」とは、言わなかったのです。そうではなくて、「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する所もない。」と言われたのです。人の子とは、自分のことを指していますから、すなわち、主イエスは、「私に従ってくるなら、体を休めて、ぐっすりと眠れるような住まいや生活は望めませんよ」、と言って、律法学者に、「そんな生活があなたに出来ますか」、と問われているのです。律法学者は、当時、社会的にも身分が高く、豊かな生活をしていましたから、立派な家にも住んでいたはずですが。しかし、そういう生活を捨てて、キリストに従えなかったのです。律法学者については、この後、何も記していませんから、多分これを聞いて、すぐすぐと立ち去ったようです。決意はりっぱで、どうどうとしましたが、この律法学者は、キリストの進む道がどのよ

うなものであるか、理解できなかったのです。

続いて、今度は、弟子の一人が、向こう岸へ行くようにという命令に対して、事情を説明して断りました。「主よ、**まず、父を葬りに行かせてください**」と。お父さんの遺体を葬ることは、息子として何よりも優先すべき大切なことですから、と理由を説明したのです。しかし、これを聞いて、主イエスは、「お父さんを無くされて、さぞかし辛いでしょう。是非行って、手厚く葬ってきなさい」とは言わなかったのです。そうではなくて、この弟子には「私に従ってきなさい」と言われるのです。「死人を葬ることは、死人に任せておきなさい」、と言われています。随分冷たいことをキリストは、言っているように聞こえますが、ここには大切なことが語られています。すなわち、この弟子は、「**まず第一にすべきことは**」、父を葬りに行くことです、と言っているのですが、それに対して、キリストは、まず第一にあなたがすべきことは、「死」の問題ではなく、「生」、「生きる」という問題と取り組むべきなのである、と答えているのです。もちろん、この時この弟子は、キリストの答えをどのように受け取ったかは、分かりませんが、キリストに従うべき弟子が、ここで、キリストに従うことがどういふことか分かっていない様子があります。先の律法学者は、「従っていきませう」と言って、すぐに挫折していますが、この弟子は、逆に、従ってきなさいと主イエスにたしなめられています。いずれにしても、主イエス・キリストの周りにいた人々がキリストに従う

ということの意味が分からずにいる様子が描かれています。

そこで、主イエスが先頭に立って、船に乗り込んだのです。それを見て、弟子たちは、続いてこの船に乗り込んだのでした。23節で、「イエスが船に乗り込まれると、弟子たちも従った」とありますが、イエスが先頭に立って、先ず第一に、船に乗り込んだ、そこで、弟子たちも続いて乗り込んだ、という書き方がここでされています。こうして、ようやく、弟子たちは向こう岸へ行くことになったのです。

ところで、私たちは、ふと考えます。私たちの人生にも、向こう岸へ行かなければならないという飛躍の時、冒険の時があるということですか。いや、ある人にとっては、雲行きが悪くても、向こう岸へ行かなければならない大変なことをすでに何度も経験してきたかもしれません。

そう考えると、私たちの人生は、みな、どこかあるところへと向かって進んでいる、というふうな思えてきます。私は、どこにも行きたくない、家にいたいと思っても、確かに、時間は、私たちを毎日、すこしずつ、どこかに向かって運んでいるのです。それぞれの進む道は異なるでしょう。ある人は、会社員としての人生を歩み、ある人は、商売の、あるいは教師として、またある人は主婦としての道を歩いていくかもしれません。皆さんは、今は、学生としての道を歩いているのです。しかし、みんな、どこかに向かって進んでいるのです。



キリストは、この日、「向こう岸へ行きなさい」と言われました。しかし、何よりもキリストがその先頭に立ってくださる、とこの日の出来事は、私たちに伝えて来ています。そして、誰でもみな、先がどうなるか分からないそれぞれの世界へと船を乗り出していく中で、信仰をもって神に従って生きていくという世界があり、そこへ向かって出発するという冒険がある、とここで、私たちに告げられています。

皆さんも、想像してみてください。キリスト教の教えを講義で受け、礼拝に出て、それは、知識として知ることも大事ですが、何よりも、あなたはキリストを信じて、どうなることかまだ分からない、向こう岸へ向かってみよう、このお方が誘うところへと向かってみよう、という気持ちを抱いて欲しいと、この時、キリスト御自身が私たちを誘っているのではないのでしょうか。

私たちは、恐れることなく、自分の目標とするところ、自分が目指す向こう岸へ大胆に向かって進みたいのです。それは何よりもキリストという私たちの主人が、私たちを愛して止まない方が、私たちの先頭に立って、先に進んでくださることによって保障されている、守られている、ということをお私たちは知るように、信じるようにと、本日の聖書の箇所は私たちに促しています。

私たちの行く手には、キリストがおられる、いやキリストが先立って、進んでいてくださる。そのことに気づき、主イエス・キリストの背中を見つめながら、私たちは、「向こう岸へ向かう」大胆で、確かな歩みを進めたいと願います。お祈りしましょう。

# 祭司的あり方と預言者的あり方

大学宗教学主任 北

博

アモス書第七章一〇〜一七節

10 ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられませんか。」

11 アモスはこう言っています。

『ヤロブアムは剣で殺される。』

イスラエルは、必ず捕らえられて

その土地から連れ去られる。』

12 アマツヤはアモスに言った。

「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。13 だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」14 アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」

15 主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、「行って、わが民イスラエルに預言せよ」と言われた。16 今、主の言葉を聞け。あなたは、『イスラエルに向かって預言するな、イサクの家に向かってたわごとを言うな』と言う。

17 それゆえ、主はこう言われる。

お前の妻は町の中で遊女となり

息子、娘らは剣に倒れ

土地は測り縄で分けられ

お前は汚れた土地で死ぬ。

イスラエルは、必ず捕らえられて

その土地から連れ去られる。」

旧約聖書には、祭司と預言者が出て来ます。両者の働きは異なってはいますが、どちらも重要な役割を果たします。両者はある場合には重なっているように見えますが、しばしば対立し、緊張関係があるように見えます。祭司と預言者は、一体どこが異なるのでしょうか。

旧約聖書は根本的に歴史に根差しているので、預言者にとっても祭司にとっても歴史はやはり重要です。しかし、祭司が過去に起こった出来事を祭儀の中で象徴化し、繰り返し演じることによっ

てそれに無時間的永遠の様相を与え、普遍的妥当性のある事柄として提示するのに対して、預言者は過去に起こった出来事を神との緊迫した関係の中で再活性化し、その出来事が新たな形で再び到来し、現実のものとなることを予告する、という違いがあります。祭司は人間の不安を象徴儀礼によって鎮静化し、人間の心に平安を与えようとするのに対して、預言者は垂直方向からの突然の呼びかけによって人間の日常性を断ち切り、人間の心を危機的状況に追いやります。端的に言うところ、祭司は現状を固定化しようとするのに対して、預言者は現状を変革しようとするのです。

言うまでもなく本日の聖書の箇所では、アマツヤが祭司で、アモスは預言者です。二人のやり取りは全く平行線で、話し合いの余地もありません。ところがこの二人は、同じ神にそれぞれの仕方です熱心に仕えているのです。少なくとも、本人達はそう確信しているに違いありません。アマツヤは、アモスを怪しげな胡散臭い人物と見ています。一二節のアマツヤの言葉は、アモスが金欲しさのためにわざと人騒がせなことを言っているというニュアンスに聞こえますし、一六節でアマツヤがアモスに対して言ったとされている「たわごとを言うな」と訳されている表現は、直訳すれば「垂らすな」という意味です。つまり、よだれをだらだら垂れ流してトランス状態でわめき散らす、危ない感じの人のことを言っているのです。一方アモスの方では、アマツヤが国家的権威を振り回す傲慢な人物であると見ているようです。またアモスは、一四節では自分が素性の正しいれっきとした土地持ち農民であること、更に一五節では自分の行為が神から直接の命令によるものであるこ

とを主張します。

さて、ここでアモスに非難されてすっかり悪者になっている祭司アマツヤを、価値判断を控えながら少し距離を置いて見てみましょう。どうもアマツヤは、全くの常識人で、職務に忠実な大変立派な人物のようにも見えて来ませんか。また、仮に私達がアマツヤの立場にいたとして、アマツヤ以上の態度を取れると思いますか。アマツヤのしている祭司としての役割は、果たして無駄で不信仰なものなのでしょうか。人の心に平安を与え、社会を宗教的に秩序化しようとする祭司の働きは、やはり社会にとって有意義なものであり、また必要なものではないでしょうか。例えばアマツヤがアモスと一緒にあって同じことを言い出したりしては、やはり社会は困るのではないのでしょうか。最近どうも私は、このアマツヤの姿に中間管理職の悲哀を感じてしまい、わが身に照らして身につまされる思いを禁じ得ないのです。

とは言え、祭司が祭司的なあり方に満足し、それで世のすべての事柄が解決すると信じてしまおうとすれば、それもまた危ういのではないのでしょうか。つまり、ある役職にいる者が、手続的な事柄で頭が一杯になってしまい、神の呼びかけ、世俗的な言い方をすれば良心の叫びを封じてしまい、本当はやるべきではないと知りながら周囲に流されて敢えてそれをやってしまったり、逆に本当はやるべきであることをやらないでしまおうとすれば、それは結局祭司的あり方自体をも破綻させてしまふことになるのではないか、と思うのです。祭司であっても、いやむしる祭司であるからこそ、

そこに預言者のあり方、すなわち預言者精神が何らかの意味で必要となってくるのではないでしょうか。預言者精神とは、たとえて言えば塩気のようなものです。私達が塩気を失ってしまったら、実に味気ない、つまらない生ける屍のような存在になることでしょう。またそのような人間の多い社会や組織の将来も、危ういものでしょう。私達は預言者にはなれないかもしれませんが、しかし、だからこそ預言者精神を失ってはいけません。預言者精神を常に心に秘めながら、与えられた持ち場を謙虚な心でしっかりと守り、日常生活を送りたいものです。

# 十字架に現れた神の力

大学宗教学主任 出村 みや子

コリントの信徒への手紙一、第一章一八節～二五節

18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとつては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。19 それは、こう書いてあるからです。

「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。」

20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵になっただけです。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになっただけです。22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人はつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24 ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

古代キリスト教の歴史は、数々の困難と迫害の歴史でもあります。本日皆さんにパウロが宣べ伝えた十字架のメッセージについてお話ししようと思っただのは、九月に本学で開催されたアジア環太平洋初期キリスト教会の一環として、オーストラリアのマッコーリー大学のケン・パーリー博士が「蓮華と十字架」と題する公開講演（キリスト教文化研究所主催）を行い、その通訳をさせていただいたのがきっかけです。マルコポーロの記録で有名な中国の泉州と、南インドにおけるキリスト教遺跡について発掘調査を行っているパーリー先生のお話しによれば、キリスト教がシルクロードを経由して初めて中国北部に到達したのは七世紀であり、南インドには海路のスパイス・ロードを經由して既に六世紀にはキリスト教が伝えられました。アジアにキリスト教を伝えたのはシリア語を話す東方のキリスト教徒たちで、彼らの宣教活動を示す現存する考古学的証言が、墓碑や碑文、彫像に見られる十字架と蓮の花の組み合わせでした。彼らは様々な困難をもとめせず、陸路と海路の長く困難な旅をして未知のアジアの各地にキリスト教を伝えました。

南インドのケララでは十字架と蓮の花の組み合わせが教会堂に見られる他、蓮の花をモチーフとした台に据えられた背の高い十字架が広場に建てられており、そこで長い期間にココナッツオイルで香が焚かれたために黒ずんだ十字架が見られます。また元の時代に海運交易の拠点として栄えた泉州でも、十字架と蓮の花のモチーフを刻んだ碑文や墓碑が多数発見されており、この地で死を迎



えたイタリア人宣教師たちの墓碑にも十字架と蓮の花の組み合わせが刻まれていたことに私は深い感動を覚えました。これらはその後キリスト教伝道が衰退してしまっただけからではなく、この都市を囲む城壁に用いられました。その城壁も二度の世界大戦時には日本軍の侵攻に備えて破壊されるという運命を辿りますが、その際に地元の学校教師で古物収修家の Wu Wenliang が十字架のモチーフが刻まれた発掘物の多くを自分の裏庭に隠して体系的に整理し、その一部を一九五七年に図版として刊行しました。彼は残念ながら文化大革命の時にその犠牲となって亡くなりますが、彼の息子さんの Wu Yuxiong が父の遺志を継いで二〇〇五年に図版を完成させました。それによって古代キリスト教がアジア伝道に向かった際に、十字架のシンボルが重要な役割を果たしていたことが明らかになったのです。

コリントの信徒への第一の手紙の一章十八節でパウロは、「十字架の言葉は、滅んでいく者にとつては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」と記していますが、今日お読みした箇所には「愚か」という言葉が何度も出てきます。二十節では、「神は世の知恵を愚かなものとされた」ことを、続く二十一節では「神が、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうとお考えになった」ことを伝え、二十三節では十字架につけられたキリストの宣教が、「ユダヤ人にとつては躓きで、異邦人には愚かなものである」と述べた後に、「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」（二十五節）とパウロは記しています。

皆さんもこれまで授業や大学礼拝でお聞きになった通り、かつてキリスト教の徹底的な迫害者であったパウロは復活のイエスと出会い、それまでの価値観が完全に覆うような体験をします。彼はそれ以前には、当時のユダヤ社会でパリサイ派の一人として誇り高い生き方をしていました。彼はガラテアの信徒に宛てた手紙の中でそうした自らの過去を振り返って「あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました」(一章十三―十四節)と告白しています。冒頭の「十字架の言葉は滅びゆく者にとっては愚かなものだ」というパウロの言葉は、まさに彼自身の過去の生き方を反映したものだでしょう。それを象徴するのが十字架です。確かに十字架はローマ帝国下で重罪人に適用される残酷な処刑の方法でしたから、当時のパウロの目には、十字架刑に処せられたイエスを救い主と信じてこれを宣教するイエスの弟子たちの活動は愚かなものとしか映らなかつたことでしょう。ユダヤ人パウロは愚かなイエスの弟子たちに躓き、彼らを徹底的に滅ぼそうとしていたのです。

しかしパウロは、復活のイエスに出会うという決定的な出会いの体験を通して、それまで彼が抱いていた価値観が完全に覆うような体験をします。人間的な目から見れば愚かとしか思えない十字架の宣教にこそ、神の救いの力が、救いの知恵が十全に示されているとの事実が目が開かれたので

す。十字架刑に処せられたイエスを救い主として宣べ伝える原始教会の「十字架の言葉」は、拷問にかけられて筆舌に尽くし難い苦しみの中で殺された人々と共に、愛の神もまた苦しんでおられることを救いと慰めのメッセージとして人々に伝えていきます。この宣教の言葉を聞いたパウロは、イエスの十字架での死は、愛の神が人間の悲惨な状態の極致に身を置いてまで、人類を救おうと意志されたことを悟ったのでした。この時からパウロにとって十字架は、神の愛がそこに具体的にリアルに示された救済のシンボルとなりました。その後、パウロ自身も原始教会の宣教活動に合流し、十字架の宣教の愚かさに彼の人生のすべてを賭け、数々の困難に直面しつつも、愚直なまでに忠実に宣教の業に専心してゆくのです。恐らくは十字架のシンボルを携えてアジア伝道に向かったシリア語を話す東方のキリスト教徒たちも、十字架が神の力の十全な表れであることに力を得て長い旅をし、未知の地の人々に十字架の救いのメッセージを伝えたのでしょう。

私たちは大学生生活において、人類がそれまで蓄積してきた知恵を学び、専門諸科学の知識を通じて新たな創造に結び付くような、知的かつ論理的な思考の訓練を大切にしています。しかしキリスト教主義大学の教育はそれにとどまらず、そうした私たちの日々の知的な探求の営みを根源から支え、人格形成の土台となるものに目を注ぐことを建学の使命とみなしてきました。人は確かな人格形成の土台なくしては、いかに立派な業績を打ち立てようとも、世間の人々からどのような称賛の言葉を受けようとも、その人生は砂上の楼閣と化してしまいます。人間存在を根本から支え、一人

一人に固有の使命を与えるものを、キリスト教は十字架に示された神の愛であると教えてきました。パウロが伝えた十字架のメッセージを、わたしたち一人一人の今後の人生を支える土台として心に刻みたいと思います。

# 豊かさを作り出す存在へ

大学宗教主任 村上みか

ルカによる福音書、第一章三三節～三六節

33 「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下に置く者はいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。34 あなたの体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば、体も暗い。35 だから、あなたの中にあ  
る光が消えていないか調べなさい。36 あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、ともし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている。」

大学に入られていくらかの時を経て、皆さんはどのような思いで大学生活を過ごされているでしょうか。皆さんは、それぞれに目標をもって大学に入ってこられたと思います。専門的な知識や技術を身に付けることや、資格をとるために勉強すること、あるいは充実したクラブ活動やサークル活動を行って、体を鍛え、能力を豊かに伸ばしていくことも、その目標の中に入っているかもしれない。あるいは、いろいろな人と交流する中で人間性を磨くなど、他にもいろいろあるでしょう。いずれも大学生ならではの目標だと思います。

しかしこの東北学院大学は、皆さんに教育の場を提供する際、ただ知識や技術を身に付け、能力を伸ばすことだけを、教育の目標として掲げているではありません。それらにまさって、人として何よりも大切な心の問題を重視し、社会へ巣立っていく若者たちが心を豊かに育み、豊かな人間性をもった人に育っていくことを、その教育の重要な課題と考えています。そのために、皆さんも礼拝に参加して、心を養われ、やがては社会に出て、そこで豊かさを作り出す存在となるよう、願われ、期待されているわけです。その皆さんに、ぜひ先述の聖書の箇所について考えて頂きたいと思えます。

この聖書の箇所では、以下のように語られています。「あなたのからだのともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁っていれば、体も暗い。だから、あなたの中にある光が消えていないか調べなさい。あなたの全身が明るく、少しも暗いところがなければ、ちょうど、ともし火がその輝きであなたを照らすときのように、全身は輝いている。」

人間の中には光が灯っていて、それが輝いていけば、その人全体が輝いているように見える、逆に中の光が消えていけば、その人の様子は暗くなるということです。その人の心のありようが、その人の様子やあり方を左右するというのです。目に見えるものを信用しようとする現代社会にあっては、目に見えない心がどうあっても、誰にも分からないし、多少悪くても、十分うまく生きていけ

る、そのように思っているところが、私たちにはあります。そのような目に見えないことよりも、目に見える現実的な知識や技術、能力に磨きをかけることの方が、ずっと意味のある大切なことだと、現代人は思っているようです。そうして目に見える、外側の世界にのみに価値をおく生活を続けるなかで、人は心の問題を置き忘れてしまい、気がついたら、いつの間にか心が枯渇していた、心が弱く、貧しいものになってしまっていた、これが今日の私たちの現実ではないでしょうか。人の心が鈍くなり、他人を思いやったり、人の痛みを感じたりする力が無くなっているのです。その結果、人は自分の思い通りにいかないと、すぐに憤り、人を傷つけ、そして殺しさえしてしまう、これが今日の社会です。殺人事件や詐欺事件が後を絶たない事実は、まさにこの現実を表しているように思われます。そして、このような社会の中では、たとえどんなに力をつけて成功しても、決して心は満たされない状況が続くのです。努力して目標を達成して、経済力や社会的地位を手に入れたとしても、信頼や思いやりを忘れた社会では、決して人間らしい、豊かな生活が約束されるわけでは無いのです。このことを現代に生きる私たちは、よく理解しておく必要があります。

その中であって、私たちは選択を迫られています。この社会の中では、そうなるしかないのだと諦め、それに流されて生きようとするのか、あるいは、少しでも人間らしい、豊かなものを求めつつ生きようとするのか。確かに人間らしい豊かな生活の方が良いと、だれもが思うでしょう。しかし自分ひとりが頑張って何かやったとしても、大した影響を及ぼせるわけもなく、やるだけ無意味

だと思いかもありません。厳しい現実を目の当たりにして、そのような虚しさを思うのは当然のことでしょう。しかし、先の聖書の箇所には、決してそれは無意味ではないのだと示されています。「ともし火をともして、それを穴蔵の中や、升の下におくものはいない。入って来る人に光が見えるように、燭台の上に置く。」—その人の中にある光が輝いている限り、それは隠れることなく、自然に外に現れ、そしてその輝きは、必ず人に見えるものとなるということです。その光は、その人自身を輝かすばかりでなく、その周りにいる人にも伝わって、その人たちをも輝かせるものとなりうるということです。だから、困難な現実の中にあっても、諦めることなく、まず自分の光が消えていないか、自分の目が濁っていないか、調べてみなさい、そうして消えかかっていけば、それが消えないように養っていきなさい、そのように語られるのです。

聖書の中には、人の心を養うために必要な言葉がたくさん詰まっています。難しいところもありますが、キリスト教学の授業や礼拝を通して、聖書の言葉を学んで頂ければと思います。そして自分のことしか見えない貧しい人間が、豊かさをもつ存在へと変わりうる、そのような可能性が一人ひとりに開かれていることを、知っていただきたいと思います。



## 「ムナの話し」

大学宗教授任 佐々木 勝彦

ルカによる福音書、第一九章一―一章―二七節

11 人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。12 イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。13 そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をきなさい』と言った。14 しかし、国民は彼を憎んでいたもので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。15 さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。16 最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。17 主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前にはごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』18 二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。19 主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。20 また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきま

した。21あなたは預けないものも取り立て、時かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』22主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、時かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。23ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』24そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』25僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、26主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。27ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』』

「たとえ話」は、言うまでもなく、何かをたとえようとしており、この何かを理解しようとするに、あまり細かい点に注意を払っても意味がありません。しかし他方で、その話が「たとえ話」であるためには、語る者と、聞く者との間に、ある共通のイメージが必要になります。例えば、聖書には、羊や羊飼いの「たとえ話」が出てきますが、もしも語る者にとって、また聞く者にとって、羊が身近な存在でないとしたら、それは別世界の話になってしまいます。したがって、違った歴史

的背景から生まれた「たとえ話」を理解するには、ある程度の予備知識が必要になります。

今日取り上げます「ムナの話」は、紀元一世紀の、地中海世界での話であり、しかも商業世界の常識を前提に、物語が展開されています。「商売」「銀行」「利息」「利益」といった経済用語が出てきます。またここには「ある立派な家柄の人」「王の位」「国民」といった政治的用語も出てきます。このどちらも、それが「たとえ話」に用いられているので、そこには共通のイメージがあったと想像されます。前者は、私たちの世界にもありますので、その価値評価は別として、何とか理解できます。しかし後者には、当時のユダヤ・ローマの政治史が反映されている可能性があり、説明が必要になります。それは、ヘロデ大王の息子の一人アルケラオスが、その後継者となろうとした際に、それに反対した人びとがいたこと、その後、直訴した者が殺害されたこと、さらにこのアルケラオスが皇帝アウグストゥスによって紀元六年に廃位されたことなどです。

「ムナのたとえ話」の一四節、二一節、二二節、そして二七節の言葉などは、この政治史を背景として読むと、語る者と聞く者の間にあった共通のイメージが見えてきます。しかしもしもこれが共通のイメージであったとしたら、この「王」のたとえは非常に危険なことになります。「王」は最初から最後まで「蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間」でしかないからです。恐ろしい存在でしかないからです。

ルカ福音書によると、この「たとえ話」は、すぐ前の「徴税人ザアカイ」の家で、イエスが語っ

たことになっており、それは「神の国はすぐにも現れるものと思っていた」人びとに語られています。この「たとえ話」は「神の国がいつ来るのか」、そして人びとは「どうすべきか」ということに焦点を合わせています。

とすれば、この「王の位を受けて帰った」主人は、神の国と共に再びやって来る「イエス」御自身であるはずですが、この「イエス」はアルケラオスのように恐ろしい存在だったのでしょうか。もしそうであれば、このたとえは非常に分かりやすくなります。特に最後の二七節の「打ち殺せ」という発言も、単なる比喩をこえた迫力をもって迫ってきます。

しかしそれでは、「徴税人ザアカイ」の結びの言葉、つまり「人の子は、失われたものを捜して救うために来た」との言葉とのギャップがあまりにも大きすぎます。この「人の子」が「イエス」御自身を指すとすれば、王のイメージは逆転されなければなりません。アルケラオスと「イエス」の違いが分からないままに、この「たとえ話」を読むならば、神の国もこの世の論理と何も変わらなないこととなります。

したがってこのたとえ話を読む際に、それが「神の国」のたとえであり、それを語っている「イエス」御自身とのつながりを意識しつつで読むことが大切です。ザアカイは「徴税人」でした。「徴税人」とは、ローマ政府あるいは領主の取立てを委託された役人であり、同胞のユダヤ人から憎まれ、宗教的にも「娼婦」などと同様に「罪人」とみなされていました。その「罪深い男」のと

ころを訪れた話、それが直前の話です。それなのに「ムナの話」を、アルケラオスのイメージで読むとしたら、それこそ、「人の子は、失われたものを捜して救うために来たこと」を忘れた読み方になってしまいます。

ルカ福音書は、この「しかけ」を通して、わたしたちに「神の国」を待つ生き方を問いかけています。

新共同訳聖書の付録についている「度量衡および通貨」によると、「一ムナ」は「ギリシアの銀貨で、百ドラクメに相当」、「ドラクメはデナリオンと等価」、「デナリオンはローマの銀貨で、一日の賃金に当たる」と記されています。つまり、「一ムナ」は労働者の約三ヶ月分の給料に相当し、決して少ない金額ではありません。この「たとえ話」によると、十人の僕がそれぞれ「一ムナ」のお金を渡されたことになっています。その託された内容は、「わたしが帰ってくるまで、これで商売をなさい」ということでした。この「たとえ話」では、その十人の中から、三人のケースが選ばれ、一ムナから十ムナをもうけた人、一ムナから五ムナもうけた人、そして最後に商売をしなかった人が紹介されています。しかしその他の七人がどうなったかは記されていません。

三人のうち、商売にチャレンジした二人は、「よくやった」とほめられています。ところが三人目の僕は「悪い僕だ」としかられ、そのお金を取り上げられてしまいます。三人目の僕はなぜ預かった一ムナを「布に包んでしまっておいた」のでしょうか。それは「恐ろしかったからです。」

最初に指摘したとおり、この「たとえ話」をすべて合理的に説明しようとすると、必ず変な結果になり、何か格差社会を奨励する話のようになってしまいます。これは「しかけ」であり、わたしたちはむしろ、恐ろしさに負けて、チャレンジすることを避けた僕の生き方に焦点を合わせるべきでしょう。人生をそもそも恐ろしいと考えて生きて行くのか、それとも「失われたものを捜し、救うために来られた方」と共に生きて行くかとするのか。それが問われているのです。しかもこの「たとえ話」によると、各人に同じ金額の元手が預けられたことになっています。これまたわたしたちにとっては、二重の意味で謎です。ひとつは、わたしたちは生まれたときから平等だと感じており、もうひとつは、「預かった」記憶がないからです。さあ、皆さんはこの問いに、何と答えるでしょうか。四年間をかけて、ゆっくり考えてみてください。人を生かすのは、かならずしもよい答えではなく、よい問いです。聖書には、このように不思議なよい問いが沢山含まれているのです。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様。礼拝のこのときを感謝いたします。わたしたちの日々発します問いだけでなく、あなた御自身による問いに気づき、耳を傾け、そして生きることができまうに。アーメン

# 「人間の尊厳とクローンニンク」

キリスト教学科長 原 口 尚 彰

## 創世記、第一章二七節

27 かみ神は御自分ごじぶんにかたどって人ひとを創造さいぞうされた。神かみにかたどって創造さいぞうされた。

おとこ男と女おんなに創造さいぞうされた。

一九九七年三月に、イギリスのシェフィールドにあるロスリン研究所で、イワン・ウィルマツトという科学者が成人した羊のクローニンクに成功しました。このニュースは瞬時に世界中を駆け巡り、人々を驚かせました。ウィルマツトは、大人の雌の羊の乳腺の細胞の核を取り出して初期化し、別の羊の核を取り出した卵細胞の中に入れて後に、雌の羊の子宮に入れて出生に到るまで育てさせ、数多くの試行錯誤の後に成功しました。これが世界最初のクローン羊ドリーの誕生で、母親の羊と全く同じ遺伝子を持っています。ドリーはその後、子を産み、クローン羊が生殖能力を備えていることを照明されました。この後、日本では成人した牛の細胞からクローン牛が創り出され、アメリカでは成人した猿の細胞から、クローン猿が作り出されました。クローン家畜を作り出す技術は、非常に優良な性質を持った家畜を再生産することを可能としたのであり、畜産技術にとっては一つ

の進歩を意味しています。

高等な哺乳動物のクローニングが成功したということは、人間のクローニングも技術的には到達可能な目標になったということを意味します。一人の人間の細胞を取り出して、クローンを作り出すことが出来れば、どんなことが起こるかという、例えば、ノーベル賞受賞者のように非常に優秀な頭脳を持つ人を何人も作り出すことが出来ます。オリンピックで優勝者のクローンを作れば、並外れた優れた身体能力を持つ人を何人も作り出すことが出来ます。また、子供が交通事故などで亡くなっても、その体細胞から、遺伝的には全く瓜二つの子供を作り出すことも出来ます。勿論、人間の人格というものは、遺伝的な形質だけで決まるのではなく、生育の社会的環境や本人の選択や体験も影響するので、遺伝的には同じであっても新しく生まれて来たクローン人間は、クローニングされた元の人間とは別人物です。

しかし、これはかつて人造人間としてSFの世界で語られていたことが、科学技術の発達によって現実になりつつあることを意味します。そこで、人間のクローニングの是非について世界中で大きな議論になりました。対応が一番早かったのが、アメリカであり、科学者や法学者、倫理学者たちによって構成される、生命倫理についての大統領の諮問委員会が開かれ、人間のクローニングは認めないという声明が出されました。その後、人間のクローニングを認めないということでは、ヨーロッパ各国や日本もアメリカと足並みを揃えました。しかし、科学者によっては人間のクローニン



グを禁止しない国に行つて、クローン人間を作り出すことを宣言している者もいます。

ここで、問題になるのは、人間のクローニングが何故いけないのかということだ。科学は現象を分析したり、技術的な可能性を論じることは出来ても、科学的に可能な技術を適用すべきかどうかという価値判断を行うことは出来ません。科学は価値中立であり、価値観を作り出すことは出来ないからです。このことは、人類が作り出した最大の大量破壊兵器である核兵器についても同じです。科学は核兵器を作り出すことを技術的に可能としましたが、核兵器を一つの具体的な国が保有すべきかどうか、持っている核兵器をどのような形で用いるのかということについては、国や社会が判断して下す決定に従うわけで、科学が結論を出すわけではありません。日本やドイツが核兵器を作り出す科学技術を持っているが持たないのは、それぞれの国民の歴史的経験と価値に基づいた政治的決断が核兵器を所有しないという選択をしているからです。

さて、人間のクローニングを認めないという、欧米や日本政府の姿勢は、妥当な結論としてマスコミや国民に受け入れられていると思います。しかし、何故クローン人間を作り出すのがいけないのかという問題について、余り論じられていません。これについても、当然論じる人によって様々な立場が可能であると思いますが、キリスト教の立場からすれば、創世記一・二七の「神は御自分にかたどつて人を創造された」という言葉が発点です。人間は生物の中で唯一、神のかたちに創造されています。つまり、人間は他の動物のように本能に従うのではなく、理性と意思と自由を持つ

た存在として創られています。ここに一人の人間の命の重たさ、人間の尊厳の根拠があります。人間を神のかたちに神が創ったのであれば、人間の創造ということは、神の領域に属することであり、人間が立ち入るべきではないのかという結論が出て来ます。クローン人間の可能性という現代の科学の問いに対して、人間の尊厳を謳う創世記の言葉の重さを再び思い起こしたいと思いません。

# アウシュヴィッツのコレベ神父の贖罪愛

経済学部教授 増田周二

## ヨハネの手紙一、第四章七〜九節

7 愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。

人間が神の愛を受けることは、あまねく全ての人に及ぶが、人間が神の愛を生きることにはなほだ少ないと言えましょう。これを意識するとき、人は深い絶望感に陥るのであります。私はこの得難い神の愛を生きた人々のいたことを、一つの事例を通して紹介したいと思います。

それはコレベ神父のアウシュヴィッツ収容所における贖罪愛であります。コレベ神父は一八九四年一月六日、ポーランドのドゥインスカ、ヴォラに生れました。十三歳で司祭になる決心をして一九一〇年、十六歳で聖フランシスコ修道会に入会し、修道名をマキシミアノとなりました。十八歳の時留学し、グレゴリオオ大学で哲学を研修し、二十一歳で哲学博士、一九一五年より国際大学で

神学コースを履修しました。一九一九年神学博士となり、ポーランドに帰国しました。同年の秋に肺結核に倒れて入院しましたが、一九二二年には闘病生活を送りながら小冊子「汚れなき聖母の騎士」を発行し、一九二七年にはワルシャワ近くに「無原罪の聖母の国・修道院」を設立しました。一九二九年にアジアへの宣教を思い立ち、一九三一年に長崎の本河町に修道院を開いています。そしてその五年後にポーランド院長に再選されたため帰国することになりました。一九三九年九月、第二次世界大戦が始まり、ドイツ軍がポーランドに侵入しました。その月の下旬にコルベ神父はドイツ軍に逮捕され、一九四一年にワルシャワのパヴィアク刑務所へ送られ、教会関係者の第十七号獄舎に入れられて重労働で病に倒れました。そのため労働不能者の第十二号舎に移され、さらに三週間後、農業従事者の第十四号舎に移されました。

当時ドイツ軍は、ソ連侵入を前にポーランド内のユダヤ人の絶滅を計画していました。毎日何千という人々が殺されていきました。その年の五月、コルベ神父もアウシュヴィッツの強制収容所へ送られることになりました。人々はそこを「死の収容所」と呼んでいました。働ける者は死ぬまで働かせ、動けなくなった者は「ガス室」で始末されました。そうでなくても毎日、毎日、大勢の人が食糧不足、寒さ、病気などで死んでおり、絶望のために高圧電流の鉄柵に登り自殺する人もいました。そうした状況で憎しみは憎しみを生み、全ての人から人間の心が奪われた状態に陥っていました。しかし、コルベ神父は憎しみで心が奪われることなく、愛がコルベ神父を精神的に自由な状態

にしていたのであります。神父は体が弱って病棟に入れられた時も、最も条件の悪い入口に寝ることを選択しました。そして彼はこう言いました。「ここにいれば、死んでかつき出されていく人々が見えます。そうすれば彼らのために祈ることができますから」。ドイツ軍は神父が人々に愛の励ましをすることを嫌ったが、神父は危険を冒してまで神の愛について語り続けました。

ある日、夕方の点呼の時に收容所長のフリッチが宣告しました。「逃げたやつが見つからない。この獄舎から罰として十人を餓死刑室で処刑する」。フリッチは恐怖に引きつった人々の前を歩きながら、気まぐれのままに十人を選びました。死刑に決まった人々は言葉も出ませんでした。だがその中の一人の軍曹が泣くような声でつぶやきました。「ああ、可愛そうな妻と子どもたち！」その時、選ばれなかった囚人の群れから一人の男が進み出ました。コルベ神父でした。そして神父はフリッチに「私があの人への代わりに死にます」「お前は誰だ」「カトリックの司祭です。私に家族がありませんから」。フリッチは一瞬沈黙しました。それは彼がかつて経験したことのない場面でした。そして生きる人の列と、死にゆく人の列が分れて進みました。コルベ神父に身代わりになってもらったイオニチック軍曹は、その時、血のような夕焼けを見たと述べております。

十人の人たちが餓死刑室に入れられると、半地下室の暗い悪臭の中で、断末魔の恐怖と水一滴も与えられない飢餓、枯渴かわきが弱り果てた身を苛むむしばのであります。そこでもコルベ神父は、超人的な気力でこの人たちを慰め励まし続けました。祭服もつけていない神父がこの人たちにとって大きな慰

めであり支えとなりました。一番早く死ぬはずの肺結核の神父が、他の九人が死ぬまでの時間を見守り、祈って、神の愛を実証したのであります。看守たちは十四日目を迎えて、ただ一人生き残っている神父を見て、フェノールの注射で殺すことを決め、注射器を持った男が室に入って来ました。その時、神父は辛うじてそのことを察知したようでした。そして自分を毒殺しようとしている男に、最後の力をふりしぼって腕をさしのべました。こうして四十七年間の長い神の贖罪愛の証の旅は終わったのです。

コルベ神父の生涯は、人間がどれほど偉大になれるか、人間として可能な限りみごとな生き方を示す希望の道しるべになったことを意味しております。

# 「火で塩味を付ける」

経営学部教授 保坂和男

マルコによる福音書、第九章四二節〜五〇節

42 「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。43 もし片方の手があなたをつまずかせらば、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。45 もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。47 もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出さなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。48 地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。49 人は皆、火で塩味を付けられる。50 塩は良いものである。だが、塩に塩気がなくなれば、あなたがたは何によって塩味を付けるのか。自分自身の内に塩を持ちなさい。そして互いに平和に過ぎなさい。」

私は経営学部の教員です。経営学部はこの四月から新しい学部として設置されました。マルコによる福音書九章四二節から五〇節を読みました。この箇所でも何度も出てくる言葉は「つまずかせる」「つまずく」という言葉です。外なる者に対しては、つまずかせるはならないと述べ、内なる自分自身に対してもつまずいてはならないと言います。片方の手がつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい、片方の足がつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい、片方の目がつまずかせるなら、えぐり出さないとそれぞれ述べています。言葉の激しさに思わず身がすくんでしまいますが、この言葉からは篤い強い志も感じられます。ここで言われているのは信仰を持つ者をつまずかせる、あるいは信仰を持つ者がつまずく、ということですが、一般的に言っても、何か事を起こそうとする時、気が弱くなり、つまずくことが多いのが実体ではないかと思えます。この聖書の箇所から感じられるのは、身のすくむ思いと同時に、激しいあふれるばかりの篤い情熱も感じます。

今日、読んだ箇所が一番、考えさせられたのは四九節と五〇節です。四九節で「人は皆、火で塩味を付けられる」と述べています。どういう意味でしょうか。四八節では「地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない」と述べられています。注釈書で調べてみますと、地獄とは私達が考える地獄とは違い、エルサレムの南西にある「ゲヘナの谷」と呼ばれている所で、ゴミ捨て場であり、死体なども焼く場所のことです。ここでは火で焼かれるとは、象徴的な事で、人は死ぬほどの苦難、苦しみによって始めて信仰、信ずる心が生まれることを言っていると解釈されます。このこ



とが「塩味」が付けられるということでしょう。

ところで、長野県にある企業経営者がいます。久世良三さんという人です。私がこの企業経営者について話したいと思ったのは、この会社には教会堂があり、この会社では毎日、礼拝が守られているからです。そして、今日読んだ聖書の箇所にも関連すると思ったからです。

長野県の企業ですが、泉キャンパスの近くの住宅団地にある大きな商業施設にもこの久世さんの店があります。最近の風潮として次のようなことがよく言われます。地球環境保護と健康な生活を最優先し、人と地球が共存できる持続可能な社会の在り方を求めようとする風潮です。久世さんの店の経営方針はまさに、このような精神に沿った店で、多くの人から支持されているようです。自然環境に配慮し、健康に暮らし、無理をせずゆったりと過ごす生き方をしようとする傾向が強まっているのが今の時代なのかと思います。『ヴィニユロンたちの食卓』という本の中で久世さんは、「経済効率のために置き去りにされた、他者に対する思いやりや人間らしい心、そして自然への敬意を取り戻したい」と述べています。『バイブルに見るビジネスの黄金律』という本がありますが、この本に久世さんのことが紹介されています。

久世さんは学生の頃は競技スキーに熱中しており、そのことが契機で、長野県でペンション経営を始めます。久世さんはその後、ペンション経営から、ジャムの製造・販売を始めます。無添加で砂糖を控えた製品が評判を呼び、売れ始めます。この頃、夫婦でフランスのノルマンディー、

ボルドーを旅行しますが、りんご園やワイナリーがある自然豊かな中でゆったりと食事のできるレストランに至る所で巡り会います。自分たちの食文化やライフスタイルに誇りを持って暮らしている人々を見て感銘して帰ってきます。この感動を長野県で再現しようとレストランも経営するようになります。ジャムの製造、レストラン経営、そしてワイン工場も作ります。事業は順調に展開していきます。

ところが、事業展開による借入金が増大し、それからはまさに苦しい経営の日々が続くことになります。久世さんは鬱的な状態に陥ってしまい、一年も近く声も出なくなるような状態になります。この時に奥さんは既にクリスマスチャンになっていましたが、久世さんに聖書を何度も読んで聞かせたそうです。聖書の言葉に慰められ、久世さんも教会に通うようになります。しかし、会社はどうにもならないような状況となります。この時に従業員を呼び、はじめて差し迫った実態について話します。弱い自分を従業員にさらけ出します。しかし、三〇人いた従業員は誰も辞めなかったそうです。逆に社内の雰囲気は変わり、皆は今までの何倍も働くようになり、会社の復興を支えてくれました。会社の製品が長野冬季オリンピックの公式商品に選ばれたことが再起のきっかけとなり、さらには軽井沢のホテルにショッピングセンターを出店し、床面積当たりトップの売上高を達成し、それがきっかけとなり、全国に出店するまでに発展します。神学校に通っていた奥さんは按手礼を受け、牧師となり、会社の敷地には教会堂が建てられます。

今日はマルコによる福音書九章四二節から五〇節を読みました。その中で四九節の「人は皆、火で塩味を付けられる」ということの意義を考えてきました。久世良三さんはまさに「火で塩味を付けられ」たのだなと思いました。『ヴィニユロンたちの食卓』という本の中で久世さんは次のように言っています。「ヨーロッパ文明とそれを支える精神文化であるキリスト教、つまり神の存在に気が付いたことで、かつての僕よりも生きる意味を見出せたと考えています」と述べています。そして、「緑あふれる広々とした場所でやさしい環境を作りたい」、「居心地の良い美しいものや（心の）美しい人に囲まれて暮らしたい」と書いてます。

今日の聖書の箇所から次のことを学びました。身のすくむ程の激しいあふれるばかりの篤い情熱を持つことの必要性と、一方では挫折、「つまづく」ことがあること、それがゆえに、苦難、苦しみによって始めて信仰、信ずる心が生まれることを学びました。まさに「人は皆、火で塩味を付けられる」ことを学びました。今日の聖書の「み言葉」から、苦しんでこそ、悩んでこそ、生きることの意味が実感されることを学びました。ここにおられる皆さんが、聖書を読んで、主の御ことばに耳を傾けることを切に願うものであります。

# 「神と試練」

法学部准教授 横 田 尚 昌

コリントの信徒への手紙一、第一〇章一三節

<sup>13</sup>あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずで。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。

いまお読みしました聖句は、多くの苦しみに遭っている人々を慰める力を持っていると考えられてきました。ただ、ここで注意して頂きたいことは、この聖句の意味を、単純に、神は人間に対して、試練からの逃げ道を与えてくださるだとか、艱難は汝を玉にするといった一般格言的な意味に捉えてはほしくない点です。

まず、この場合、試練に遭うのは、一般の人総てではありません。そうではなくて、キリスト教を信仰する者、つまり信仰者が試練に遭います。そして、その試練を仕掛けるのは、ほかならぬ主なる神なのです。こうして、信仰者は、主なる神に対する自らの信仰それ自体が、主なる神によって試練にさらされることとなります。しかも、ある注解書によれば、原文の文字からすると、ただ

苦しみもだえるばかりが試練ではなく、ときに誘惑という形で試練は信仰者に迫ってくる。試練とは、したがって、信仰が試されるときでもあると解釈されています。

それでは、信仰者が試練に遭う、試される信仰とは何でしょうか。これは、神は真実な方だとされる、その真実とは何かに係ってくる問題です。旧約聖書にあっては、真実ないし真理とは神の本性を表す言葉として用いられています。単なる抽象的な概念や知識といったものではなく、神、主なる神こそが真実である、といった人格的な捉え方がなされているようです。

詩編の一九編一〇節には、「主のさばきはまこと、ことごとく正しい」とあります。

したがって、信仰者にとっての試練とは、主なる神の裁きが、正しいものとして信じ切ることができるかどうかにかかっているといえましょう。裏から言えば、神のお裁きの正しさを信じ難くするような誘惑に打ち勝てるかどうかで問われるのです。

ここまで申し上げますと、信仰者は、神の真実について、一体、何を拠り所としてきたのだろうか、疑問に思われるかもしれません。確認しておかなくてはならない重要なことですが、新約聖書の下においては、ほかでもなく、キリストの救いを拠り所としてきたのであります。

ニカイア・コンスタンティノポリス信条では次のように記します。

「主は私たち人間のため、また私たちの救いのために、天より降り、聖霊によって、おとめマリヤより肉体を取って、人となり、私たちのためにポンティオ・ピラトのもとで十字架につけられ、

苦しみを受け、葬られ、聖書に従って、三日目によりみがえり、天に昇られました」とします。

このような主イエス・キリストの十字架の贖いによって、神の真実があらわされたと言われます。そして、神が成し遂げてくださったこの救いが、いかに喜びに満ち確かなものであるのか、それを、神の真実として感謝をもって信じ切ることができるのかどうか、試練の場面で試されます。

では、その試される場面とは、具体的にどのような場面なのでしょう。聖書を拝見しますと、神が直接的に人間をお試しになる場面があったり、キリスト教が、迫害を受ける場面があったりします。しかし、そのような場面を現実には知り得ない私たちです。信仰の与えられていない人も多くいます。そのような私たちなのですが、ときに解決困難な苦しみにもだえたり、もって行きどころのない悲しみに接したりすることがあると思います。こうしたとき、たとえ信仰者でも、神の真実を疑ってかかり、厭世的になったりはしないでしょいか。あるいは、なかなか結果が出せないときや、失敗を繰り返してしまったり、所詮俺なんて何の役にも立たない木偶の坊だ、と思い込んで、あとは遊んでしまっただけ、ということになりはしないでしょうか。神の慈しみをかえりみず投げやりになってしまわないでしょうか。

もし、そのように厭世的になったり、遊び呆けたりするようでは、とてもじゃないが、言葉を飲み込んでする地道な努力や、一步一步冷静かつ着実になすべき懸案事項の処理など、できようはずがありません。そのような者は、いわば自らに墓穴を掘って、他の者との格差は一層拡大し、もっ

てまことの負け組となってしまうでしょう。すなわち、こうしたまことの負け組になるかどうかの正念場のところで、信仰者の場合、信仰の試される場面が出てくるといえるのかもしれない。

かくして、そのような場面に臨んでも、なおも神の真実を信じ切ることができるならば、その信仰は堅固となり、よりいっそう神との交わりが深められることでしょう。しかも、試練に耐えるための逃れる道が、そこには確かに与えられているはずです。なぜなら、神が真実であると信じ切ること自体が、実は、逃がれる道だといってよいからであります。

それでは、信仰を得ていない人の場合、神は全く無関心でおられるのでしょうか。

弱音をはかず、冷静かつ着実に懸案事項を処理してきた真面目な人が、しばしば、九死に一生を得たとか、もう一度だけ挑戦してそれで駄目だったら諦めようと思って臨んだら成功したと語るのをしばしば伺うことがあります。もちろん、このこと自体は、今問題としています信仰の試練の問題に直結させることはできません。自らに選びとった試練の克服という面があるからです。しかし、こうして成功した人々はその成功理由の中に、本人の努力や周りの支えだけでは説明しきれない何かがあるとすれば、たとえ信仰者でなくても、そこに神のお計らいがあったといえる余地があるかもしれません。

もし、そうだとしますと、その人の成功の背景には、神の試練に耐えんとする信仰者の心構えに相通じるその人自身のひた向きさがあった。それゆえに、信仰が与えられていなくても、神は、そ

の人に逃れる道を備えていくくださった。そう思える何かが聴こえてくることでしょう。

ですから、この混沌とした世の中にあって、いかに苦難がふりかかってようとも、絶望せず、ひたむきに生きることを求める、いつも神に喜ばれる私たちでありたいと思います。

最後に、聖書からの示唆として、創世記二二章のところを御紹介してお祈りしたいと思います。

アブラハムは、すでに年老いていたにもかかわらず、妻サラとの間に、奇跡的に子供を授けられました。その子はイサクと名付けられましたが、ある日、アブラハムは神から、その一人子イサクを犠牲として捧げるようにと命じられました。この残酷な神の御命令に対して、それでもアブラハムは従順に従うべく、イサクを薪の上に載せて焼き尽くす献げ物としてささげようとなりました。その時です。主なる神の御使いがアブラハムに言いました。「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった」。そして、主なる神はイサクの代わりに一頭の雄羊を与えてくださったのです。このように、神はアブラハムに対して、逃れる道を備えてくださいました。しかし、神がそうしてくださいましたのは、あくまでもアブラハムが神を信じ切っていたからです。試練に打ち勝ったからなのであります。

お祈りします――



# 「あなたは魂と体が離れていませんか」

工学部准教授 志賀野

洋

フィリピ信徒への手紙、第四章四節〜九節

4 主しゅにおいて常に喜びよろこなさい。重ねて言いいます。喜びよろこなさい。5 あなたがたの広い心こころがすべての人ひとに知られるようになさい。主しゅはすぐ近くちかにおられます。6 どんなことでも、思い煩わづらうのはやめなさい。何事なにごとにつけ、感謝かんしゃを込めて祈いのりと願ねがいをささげ、求めてもとめているものを神かみに打ち明あけなさい。7 そうすれば、あらゆる人知じんちを超える神かみの平和へいわが、あなたがたの心こころと考かんがえとをキリスト・イエスによって守まもるでしょう。

8 終おわりに、兄弟きょうだいたち、すべて真実しんじつなこと、すべて気高けだかいこと、すべて正ただしいこと、すべて清きよいこと、すべて愛あいすべきこと、すべて名譽めいよなことを、また、徳とくや称賛しょうさんに値あたうことがあれば、それを心こころに留とめなさい。9 わたしから学まなんだこと、受うけたこと、わたしについて聞きいたこと、見みたことを実行じっこうしなさい。そうすれば、平和へいわの神かみはあなたがたと共ともにおられます。

皆さんC・S・ルイスって御存じですか。ナルニア国物語り：日本語訳では全七巻、「ライオンと魔女」「カスピアン王子の角笛」「朝びらき丸東の海へ」「銀のいす」「馬と少年」「魔術師のお

い」「やじの戦い」…ナルニア国の誕生から死滅までを描いた壮大な物語で、アスランというライオンがイエス・キリストを指し示しているといわれています。…の著者ですといってわかる人は、小学生の頃に良く本を読んだ人だと思えます。ファンタジーに分類される本ですが、ハリ・ポッターシリーズが映画化されて大成功だったので、ディズニーが映画化を決めて、最初の「ライオンと魔女」を二五年映画化しました。先々週の四月四日にも二回目のテレビ放映があったので御覧になっているかもしれません。このC・S・ルイスはケンブリッジ大学の教授で、イギリスでは名高い評論家・作家でもありました。この人は「キリスト教の精髓 (mere christianity)」という本も書いています。この mere というのは酒をうすめていないという意味です。生一本の酒ということで、生一本のキリスト教を語ったのがこの本です。このキリスト教の精髓についてはこれから礼拝で話す機会もあると思いますので、この本を訳した人の方について少しお話しします。mere christianity をキリスト教の精髓と訳したのが、柳生直行というC・S・ルイスの研究者として著名な英文学者です。キリスト教主義の大学の学院長をつとめた方です。この方の講話集に「おのれを低くする者」という本があります。マタイによる福音書五章三節から十二節の「山上の説教」とよばれるイエス・キリストの説教の最初の部分「幸いなるかな心の貧しき者、天国はその人のものなり。」を「幸いなるかなおのれを低くする者、天国はその人のものなり」と私訳していますが、それが本の題名になっています。その本の中でこう言っています。「奉仕、謙遜、義務、服従、忍耐、

徳行、感謝、自己放棄、犠牲、聖性、自己否定、これらの言葉を聞いて、古臭いとか、けむたいとか、おれには関係ないとか、感ずるようでしたら、あなたがたの魂は体から離れていると言っているでしょう」。東北学院は：教育には知育、徳育、体育がありますが、それらにくわえて：霊性の修養、陶冶もその教育的使命と考えております。

前のローマ法王ヨハネ・パウロ二世は和解と平和を訴え続けた方でした。すなわち、「開かれた教会」をめざし、他宗教と協調をはかる路線へ転換し、十一世紀に分裂した東方教会をはじめ、十六世紀に宗教改革で別れた新教諸派と対話を重ねました。二千年の節目にあたっては、ガリレオ裁判や十字軍遠征、ユダヤ人差別などで信者が過ちを犯したことを認めました。ユダヤ教やイスラム教との対話と和解を訴えました。最も力をいれたのは平和の訴えでした。九一年の湾岸戦争などに強く反対し、二三年のイラク戦争前には特使をイラクやポワイトハウスに送り込みました。そのように和解と平和を訴え続けた行動性を持つとともに、深い霊性も感じさせる人であり、まさに「霊性と理性」の宗教者であるといわれてました。九八年に発表した回勅「信仰と理性」では、若い頃：ナチスドイツがポーランド侵攻し、第二次世界大戦が始まった時、後にヨハネ・パウロ二世となるカロール・ボイチワは哲学科の学生でした。独軍によって大学は閉鎖されます。ドイツで強制労働させられる国外追放をさけるため、クラクフ郊外の石切場で働きました。やがて、地下組織で神学を学び、司教になり、クラクフ大司教を務めました。：：哲学を研究した人らしく哲学の大

切さを説いていますが、それは「神の啓示を欠いた理性は偽りの旅路をさまよう」という立場からでした。だから唯物論などの「信仰なき哲学」に対しては「哲学の傲慢」として批判しています。その一方で「理性なき信仰」に警告して「か弱い理性に反して、信仰がより強い力をもっていると考えるのは幻想だ。それは、迷信となる重大な危険を冒す」とのべて、イエスよりも聖母マリアに熱をあげる信徒には「行き過ぎぬように」と戒めています。地動説のガリレオを断罪した法王庁の過ちを認めたことも理性の表れだったろうといわれています。

「靈性と理性」を兼ね備えた人を世に送り出すことは、東北学院のみならずキリスト教主義の大学の悲願です。

今日の聖書で使徒パウロは、すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称讚に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさいとすすめています。大学時代は、それらのものを中心とめられる時期です。魂が体から離れることなく、各自の魂をみがかれんことを祈念いたします。

with the famous gospel music writer, Fanny Crosby.

Today, this simple but deeply meaningful hymn is printed in numerous hymn collections. It has been translated into many languages, including Arabic, Chinese, and Japanese (賛美歌 21 483 番). Christians around the world are still singing this beautiful hymn.

I should like to close with another poem about God's love that expresses some of the same spirit Elizabeth Prentiss exhibited in her hymn. This poem is by Christopher Wordsworth.

"Gracious Spirit, Holy Ghost,  
Taught by Thee, we covet most,  
Of Thy gifts at Pentecost,  
Holy, heavenly love.

"Love is kind, and suffers long,  
Love is meek, and thinks no wrong,  
Love than death itself more strong;  
Therefore give us love.

"Faith and hope and love we see,  
Joining hand in hand, agree;  
But the greatest of the three,  
And the best, is love."

Would fill this empty room;  
  
That my rich heart would gather flowers  
From childhood's opening bloom:  
One child and two green graves are mine,  
This is God's gift to me;  
A bleeding, fainting, broken heart,  
This is my gift to Thee.

During this difficult period, Elizabeth's thoughts turned to the biblical story of Jacob. At a time of great sorrow and need, Jacob met God in a special way. Elizabeth prayed that she too might have a similar experience during her time of grief. She expressed her thoughts in the words of today's hymn, "More Love to Thee." Interestingly enough, she wrote all four verses in one evening. For some reason, however, she did not think the lyrics she wrote were very good, and for several years she did not show them to anyone. Even her husband did not see the words for 13 years. Nevertheless, the hymn eventually became very popular. It was first printed in 1869 as a leaflet. Later it appeared in a hymnal entitled Songs of Devotion, which was edited by William H. Doane.

Doane also composed the music that goes with Elizabeth Prentiss' lyrics. Doane was actually a very successful businessman and philanthropist, but he wrote gospel songs as an avocation. During his life he wrote more than 2000 songs. On several songs, he collaborated

her eye. She had a strong spirit. Elizabeth did not, however, have a strong body. She was frail and usually in pain. She often found it difficult to leave her home. Nevertheless, her condition only seemed to make her love for God stronger. She once wrote the following: "To love Christ more is the deepest need, the constant cry of my soul . . . out in the woods, and on my bed, and out driving, when I am happy and busy, and when I am sad and idle, the whisper keeps going up for more love, more love, more love!"

Elizabeth was a gifted writer. At the age of 16, her writing was published in a magazine for young people. After a period teaching school in Massachusetts and Virginia, she married a minister, George L. Prentiss. Her husband later became a seminary professor in New York. Elizabeth continued her life as a writer and produced a book entitled Stepping Heavenward, which sold over 200,000 copies in the United States.

Elizabeth Prentiss wrote "More Love to Thee" during a difficult period in her life. While she and her husband were working together at a church, they lost a child. Later, their youngest child also died. Elizabeth was devastated. Seeking solace through literary expression, she wrote the following poem. Even in this honest expression of her overwhelming grief and sadness, her faith and confidence in God's grace and sustenance comes through clearly. Please listen as I read her touching words.

I thought that prattling boys and girls

# ENGLISH CHAPEL SERVICE

キリスト教学科 David N. Murchie (マーチャー, ディビッド)

**SCRIPTURE READING** : 1 John 4 : 15~21

(ヨハネの手紙一 4 : 15-21)

<sup>15</sup> Whoever confesses that Jesus is the Son of God, God abides in him, and he in God. <sup>16</sup> So we know and believe the love God has for us. God is love, and he who abides in love abides in God, and God abides in him. <sup>17</sup> In this is love perfected with us, that we may have confidence for the day of judgment, because as he is so are we in this world. <sup>18</sup> There is no fear in love, but perfect love casts out fear. For fear has to do with punishment, and he who fears is not perfected in love. <sup>19</sup> We love, because he first loved us. <sup>20</sup> If any one says, "I love God," and hates his brother, he is a liar; for he who does not love his brother whom he has seen, cannot love God whom he has not seen. <sup>21</sup> And this commandment we have from him, that he who loves God should love his brother also.

**SERMON** : "A Song about Love"

At the beginning of our worship service today, we sang the hymn, "More Love to Thee." The words of this hymn were written during the 19th century by an American woman named Elizabeth P. Prentiss. Elizabeth was a person of deep, Christian faith. People thought of her as a person who "continually practiced the presence of Christ." She was a happy person who usually had a twinkle in



## 編集後記

大学宗教主任 北 博

東北学院大学礼拝説教集第十四号をお届けします。お忙しい中で執筆してくださった先生方、そして連絡や編集実務に当たってくださった方々に、お礼を申し上げます。また、この一年大学の礼拝に直接間接お手伝いいただいた方々に、心からの感謝を申し上げます。

東北学院大学では、土樋キャンパス、泉キャンパス、多賀城キャンパスのそれぞれのチャペルにおいて、学期中は日曜と祝日を除いて、月曜日から土曜日までの毎朝一時限目と二時限目の間に、礼拝が持たれています。加えて、土樋キャンパスでは特に夜間主コースの学生のために水曜日毎に、また三つの寄宿舎でも寮生のために週一回、それぞれ夜に礼拝が持たれています。

ここに収められているのは、二〇〇九年度の本学の大学礼拝で語られたことの一部です。東北学院大学では、礼拝を教育の一環として重視しています。戦争や核の拡散、地球規模での環境破壊、飢餓と貧困、それに世界的な経済不況など、世界は様々な問題を抱え、先行き不透明です。この混乱する現代において、若者の心に届く言葉を語りかけるのは容易ではありません。この説教集を通して、教育の場でのそのような手探りの模索をご理解いただければ幸いです。



# 大学礼拝説教集

第十四号

二〇一〇年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 佐々木哲夫

編集責任者 大学宗教主任 北 博

出版社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学

宗教事務課

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎〇二二・二六四・六四二八

